

平成 26 年度 文化庁委託事業

**国際発信力のある現代美術のキュレーター
育成のための状況等に係る調査
報告書**

平成27年 3 月

株式会社 野村総合研究所

目次

第1章 本調査事業の概要	5
1－1．背景と目的	6
1－2．本調査の内容・手法	6
1－3．実施体制	11
第2章 現代美術のキュレーターの状況	13
2－1．現代美術に関する認識	14
2－2．将来への展望	18
第3章 現代美術のキュレーターの活動に係る課題	21
3－1．課題の全体像	22
3－2．キュレーター個人に関する課題	23
3－3．キュレーターを取り巻く環境の課題	28
3－4．その他の問題点	37
第4章 国外のキュレーターによる我が国の認識	39
4－1．調査概要	40
4－2．調査結果	41

第1章 本調査事業の概要

1-1. 背景と目的

文化庁では、国際発信力のある現代美術の新進芸術家やキュレーターの育成を推進している。近年、海外で活躍するキュレーターが多くみられるようになったものの、その育成に係る課題は十分整理されておらず、また、キュレーターの間ではそれぞれが持つノウハウ等が十分共有されていない、協業が十分に行われていない等の課題もみられる。

本事業においては、キュレーターが国際的な活動を展開する上での課題を互いに共有し、解決するための場を設けることで、その活動に必要な人的ネットワークの構築や我が国の現代美術の戦略的な海外発信に資する情報の調査分析等を行い、国際発信力のある有力なキュレーター育成の一助となることを目的とする¹。

1-2. 本調査の内容・手法

本調査では、以下の3つの事柄に関して調査・整理を行った。

- ・現代美術のキュレーターの状況（第2章）
- ・現代美術のキュレーターの活動に係る課題（第3章）
- ・国外のキュレーターによる我が国の認識（第4章）

また、これらの事柄の調査・整理においては、意見交換会、個別ヒアリング、アンケートを実施した。調査内容と調査手法の対応を整理したものは次表である。

図表・1 調査内容と調査手法の対応

	調査手法		
	意見交換会	個別ヒアリング	アンケート
現代美術のキュレーターの状況	○	○	
現代美術のキュレーターの活動に係る課題	○	○	
国外のキュレーターによる我が国の認識			○

¹ 本事業仕様書より引用。

1)意見交換会

様々な環境で活躍する現代美術のキュレーター等 29 人に参集頂き、互いの障害・課題及び解決策を検討するための意見交換会を実施した。

意見交換会は全国3ヶ所（仙台、京都、東京）にて計6回実施した。各回5名程度が参加し、約2時間の討議を行った。意見交換会は一般公開型で行い、榊野村総合研究所のWebサイトやSNS等様々な媒体において周知を行った。意見交換会の概要は次表のとおりである。

図表・2 意見交換会の概要

開催回	開催日時	会場		定員
第1回	2015年2月14日（土）14:00~16:00	仙台会場	TRUNK 特設スペース	40名
第2回	2015年2月22日（日）13:00~15:00	京都会場	京都芸術センター	80名
第3回	2015年2月22日（日）15:30~17:30		フリースペース	
第4回	2015年3月20日（金）18:30~20:30	東京会場	野村総合研究所大会議室	80名
第5回	2015年3月21日（土）11:00~13:00		東京国際フォーラム	80名
第6回	2015年3月21日（土）15:00~17:00		D1 ホール	

意見交換会への参加者は、各地域においてネットワークを持つキュレーターや文化庁との協議のもと、アートプロジェクトに関わるキュレーター、美術館に属しているキュレーター、インディペンデントのキュレーター等から、活動の形態と地域バランスを考慮して選定した。

意見交換会への参加者は次表のとおりである。

図表・3 意見交換会の参加者

開催回	氏名	所属等
第1回	大澤苑美	・八戸市まちづくり文化推進室 芸術環境創造専門員
	長内綾子	・Survivart
	カジタシノブ	・札幌国際芸術祭 2014 プロジェクトマネージャー
	清水建人	・せんだいメディアテーク 学芸員
	宮本武典	・東北芸術工科大学 美術館大学センター 准教授 ・みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ プログラムディレクター
第2回	芦立さやか	・東山 アーティスツ・プレイスメント・サービス
	岡田有美子	・アートプロデュースユニット cimarcus 主宰 ・sima art labo 共同代表
	木ノ下智恵子	・大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任准教授
	櫛野展正	・鞆の津ミュージアム キュレーター
	山本麻友美	・京都芸術センター シニア・アート・コーディネーター
第3回	赤井あずみ	・鳥取県立博物館 美術振興課 学芸員 ・ホスピテイル・プロジェクト キュレーター
	国枝かつら	・丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 学芸員
	橋本裕介	・ロームシアター京都 プログラム・ディレクター ・Kyoto Experiment プログラム・ディレクター
	山中俊広	・奈良・町家の芸術祭 はならあと アートディレクター ・the three konohana 代表
	吉田有里	・港まちづくり協議会 事務局員

開催回	氏名	所属等
第4回	会田大也	・東京大学大学院 GCL 育成プログラム 特任助教
	飯田志保子	・東京藝術大学美術学部先端芸術表現科 准教授
	小川希	・Art Center Ongoing 代表
	長谷川新	・インディペンデント・キュレーター
	服部浩之	・青森公立大学 国際芸術センター青森 学芸員 ・あいちトリエンナーレ 2016 キュレーター
第5回	木村絵理子	・横浜美術館 主任学芸員
	佐脇三乃里	・黄金町エリアマネジメントセンター アシスタントディレクター
	中野仁詞	・神奈川芸術文化財団 学芸員 ・第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 2015 日本館キュレーター
	林暁甫	・inVisible 代表 ・鳥取藝住祭 2014 総合ディレクター
第6回	遠藤水城	・HAPS エグゼクティブ・ディレクター
	花田伸一	・インディペンデント・キュレーター
	平野真弓	・98B COLLABoratory 共同創立者
	堀内奈穂子	・NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ[AIT/エイト] キュレーター
	堀川理沙	・シンガポール国立美術館 シニア・キュレーター

意見交換会の進行は、以下のアジェンダに沿って行った。なお、各回のモデレーションは(株)野村総合研究所の綿江とアートフェア東京の金島が行った。

図表・4 意見交換会のアジェンダ

- ・参加者の自己紹介
- ・国内外でキュレーションを行う上での障害
- ・国内事業を海外に発信する上での障害
- ・日本の現代美術界の問題点・今後進むべき方向性
- ・公的な支援の問題点・必要だと考える公的な支援

図表・5 意見交換会の風景（第1回）



図表・6 意見交換会の風景（第 2 回）



図表・7 意見交換会の風景（第 3 回）



図表・8 意見交換会の風景（第 4 回）



図表・9 意見交換会の風景（第 5 回）



図表・10 意見交換会の風景（第 6 回）



2)個別ヒアリング

意見交換会の参加者に対して、1 人あたり 1 時間程度の個別ヒアリングを実施し、公開の間では伺いづらな事柄、特に深く把握したい事柄等の把握に努めた。

個別ヒアリングにおける具体的な質問項目は以下のとおりである。

図表・11 個別ヒアリングの質問項目

- ・ご経歴（教育の過程、これまで所属してきた組織、関わってきたプロジェクト等）
- ・収入の基盤
- ・（国内・国外で）アートプロジェクトを行う上での障害・課題
- ・将来に向けたキャリアプラン・不安等
- ・国外での活動の予定・希望等
- ・国内外の現代美術に係る情報の収集方法・状況、人脈の構築方法・状況
- ・日本の現代美術界の問題
- ・必要だと考える公的な支援

3)アンケート

本事業実施メンバーがネットワークを持つ、国外の主要なキュレーターを対象に電子メールによるアンケート調査を行い、我が国の現代美術に関する認識を把握した（有効回答は 34 サンプル）。具体的な調査項目は以下のとおりである。

図表・12 アンケート調査の調査項目

- ・日本に関する展覧会の開催経験
- ・興味を持っている日本人芸術家
- ・日本に関して興味のあるトレンドや動き
- ・日本の現代美術家に関する情報収集の方法・よく利用する情報源
- ・日本の現代美術の状況についてリサーチをする上で不足しているもの
- ・将来的な共同企画・協業への関心 等

1－3. 実施体制

本調査研究は、各分野の専門的な知見を活用するため、榊野村総合研究所と各分野に精通する外部の調査員で協力して行った。具体的な体制は以下のとおり。

- ・綿江 彰禅 榊野村総合研究所 公共経営コンサルティング部 主任コンサルタント（主担当）
- ・金島 隆弘 アートフェア東京 プログラム・ディレクター
- ・高村 美和 アートプロジェクト・コーディネーター
- ・小形 幸 アートプロジェクト・コーディネーター
- ・児島 やよい インディペンデント・キュレーター（第 4 章の実査を担当）

（2015 年 3 月時点）

第2章 現代美術のキュレーターの状況

2-1. 現代美術に関する認識

本節では意見交換会に参加した29名のキュレーターの意見を基に、「現代美術はどのような存在であるか・どのような点に価値が見いだされるか（現代美術の価値）」、「なぜ現代美術を公的資金にて支援する必要があるのか（現代美術の支援の根拠）」、「現代美術は今後どのような方向に向かっていくべきか（現代美術が進むべき方向）」、「キュレーターをどのような職業・役割だと捉えているか（キュレーターの役割）」といった点に関する認識を整理している。

1) 現代美術の価値

発言のポイント

- 現代美術は社会における多様性の担保や社会問題に光を当てるという機能を持つ。
- 批評性を育み、また生きるための勇気・活力の源ともなる。
- 人々が豊かに生きるために必要不可欠な存在である。

意見交換会・個別にアリングでの意見

- ・我々が認知できる形式を超えたところにアートや文化は深く根ざしている。いまだ見出せていないものや定義できないものに対する投資は絶対に必要で、これまでもそれを踏まえた上で経済は循環してきた。現在は情報の透明化が謳われ、金銭の使途の明確さが問われ過ぎているからこそ、飢饉やデフレが一気に進行した際に対処できなくなってしまうという現実があり、これは経済学的にも言われていることである。情報の伝達が緩やかだった時代の方がお金の循環が健全であったりするのである。そういった事も包括的に考慮された価値について、私たちは今後も訴えるべきではないかと考えている。
- ・アーティストは皆大変だと思うが、とても創造的な生き方をしていて、「どう生き抜いていくか」という試みをととても意識的に行っている先駆ではないかと思っている。人口減少の一途を辿る中、私は、皆が9時~17時労働の生活ができる状態ではなくなっていくだろうと見込んでいる。もっと生き方のバリエーションがないと生き抜けない世の中になるのではないだろうか。私はアーティストのクリエイティブな生き方に魅かれている。人があまり見向きもしないものに目を向け、価値を与えることを重視しないと社会が縮小していくのではないだろうか。それをできるのがアーティストだと考えている。
- ・アートの位相ではなく、社会の中で自分の活動がどこにつながっているかを意識することが大切だと思っている。それを目的にしたり、作品が実際に社会貢献したりする必要はなく、むしろ、社会から「NO」と言われている事象に対して、解決ではなく問題提起することこそ、アートが唯一できることだと考えている。
- ・知的好奇心は誰もが持っているものだと思う。その好奇心や社会に関わる批評性を育むためにアートや現代美術が有効ではないかと思う。住む場所は関係なく、むしろ地方に住む人こそ、それを振り返る機会が少ないから重要ではないか。
- ・生きがいのない人生のまま墓場に行くことのないよう、人間にはアートが必要で、アートは人生に栄養を補給するためのものだと思う。私はよくアートを医療に例えながら考えている。病気になってから治療を考えるのではなく、予防医学として社会にアートが捉えられればよいのではないかと思う。うつ病や自殺意識を持つ人を街に増やさないための予防医学としてのアートであり、そのための税金投入の必要性を考えてみればよいのではないだろうか。

2)現代美術の支援の根拠

発言のポイント

- 現代美術作品のなかには価値が定まっていないものも多く、市場原理によってだけでは支えられない部分が必ず生じる。
- また、多様性の担保、生きるための勇気や活力の人々への提供等、公共性の高い機能を有するため、そこには公的な支援が必要である。

意見交換会・個別にアリングでの意見

- ・アートには2つの役割があり、1つは評価が確立したものを見せ続けること、もう1つは価値が作られつつあるものを社会に投入していくことである。アートに関わる施設は、例えばルノワール展のような価値の確認だけではなく、日常にはない、プラスになる刺激を社会に与えなければならないと思っている。まだ評価が確立していないものを、先駆となって支援する必要があるのは公的美術館や行政機関である。
- ・公共が福祉に出資することは人々から賛同されやすいものだと思っている。しかし、多くの人が望んでいるものに支援することが必ずしも望ましいとは言えない。例えば、誰も読まない本が図書館で保管されていることの意味を考えた時に、ベストセラーだけが収蔵されている図書館がいかにつまらないものかを想像して頂ければよいだろう。アートはある種の狂気を含んでいると思っている。つまり、公共が何をサポートしていくのかという問題は、何パーセントの狂気に対して支援していくのかという問題と密接に関わるものである。
- ・そもそも税金の再分配は平等ではないことを前提とした上で、なお私は文化に予算を投入して欲しいと思っている。その理由の1つは、多様性の担保にある。恐らく単一性よりも多様性のある社会の方が、持続可能性があると思っている。東日本大震災のように、ある価値観が崩れてしまうような現象が起こった時に、それまで正しいと思っていた前提が間違っていたとなると、多様性を認める意識がなければそこから新しいものは立ち上がってはこない。
- ・アートに税金を使うことは、日常の中では見えないもの、無視されているものに価値を見出すことがアートくらいにしかできないという点から正当化されるのではないかと。地域に暮らしている人たちも気付きにくいことがある。そこにある面白さや発掘されていない価値を掘り起こしていくことがアートやアーティストの役割ではないか。すでに評価が確立しているものを別の場所に持って行って見せるよりは、何もないと思われていた場所に実はあることを観察し、発見するような小さなアクションの積み重ねにアートの価値がある。それは一見無駄な行為だから、税金でもない限りお金がつかない。結果がどうなるかわからないことに民間は投資しないので、税金の方がやりやすい。
- ・知的好奇心は誰もが持っているものだと思っている。その好奇心や社会に関わる批評性を育むためにアートや現代美術が有効ではないかと思う。住む場所は関係なく、むしろ地方に住む人こそ、それを振り返る機会が少ないから重要ではないか。だからこそ公的資金を投入して支援していくべきではないかと考えている。(再掲)
- ・生きがいのない人生のまま墓場に行くことのないよう、人間にはアートが必要で、アートは人生に栄養補給するためのものだと思っている。私はよく医療に例えながらアートを考えている。病気になってから治療を考えるのではなく、予防医学として社会にアートが捉えられればよいのではないかと思う。うつ病や自殺意識を持つ人を街に増やさないための予防医学としてのアートであり、そのための税金投入の必要性を考えてみればよいのではないだろうか。(再掲)

3)現代美術が進むべき方向

発言のポイント

- 我が国において公的に現代美術を支援することは、必ずしも多くの国民の支持が得られているとはいえない。
- 今後は、現代美術に携わる方々が、現代美術の貢献領域の拡張、公的資金による支援の論理的裏付けの検討、一般の人々との対話等に取り組むことが重要である。

意見交換会・個別にアリングでの意見

- ・日本では、誰かが「こんな変なアーティストにどうして公共のお金を払わなければならないのか」と言い出せば、誰も返す言葉が無くなってしまうという状況がある。これは私たち自身の問題でもあると思っている。
- ・自分たちが自覚的に参画しないと芸術祭は続かないということを市民が理解しなければ成立しないものの、理解されていない現実がある。
- ・今の文化への税金の使われ方が必ずしも良いとは思わない。創造性を拡張するのがアートの効用なら、例えば、福祉、教育、道路整備等にも活用されるべきであろう。(再掲)
- ・国際交流基金の年間予算のほとんどは伝統芸能やクラシックに割かれていて、現代美術は10%程度である。現代美術論壇の人たちは予算が十分ではないと不平を訴えているようだが、日本の芸術文化体系全般で見ると、十分に芸術文化に予算を投じている。アートはそんなに万能でもないし、そんなにすごいものでもない。もし、現代美術がより戦略的可能性を持ち、豊かになっていく分野であるならば、行政のニーズも含めて自分のキュレーターとしての役割や能力を拡張していかないといけない。現代美術原理主義として内部の言語でしか戦えないキュレーターならばその10%の予算内に留まるしかなく、拡張していくためには発想の転換が必要なのではないかと思っている。
- ・公的資金が中央に集められ、不平等に分配されている中で目指すべきところは「ゆたか」な社会である。その「ゆたか」という言葉の中には、科学技術・福祉・教育・文化等様々な必要事項がある。ただし、どんどん税収が少なくなっている現状であるならば、優先的に不可欠になるインフラから予算を付けるべきだと思っている。その時に文化が残るかは否か曖昧であり、曖昧であるがゆえに、やはり検討のうえ対策を取っておくべきであると思っている。
- ・華々しいキュレーターの活躍とは対照的に、学芸員にはそれなりの責任もあると個人的には思っている。というのも、館の外の社会にPRすることなく、自分1人で閉じこもりがちであり、その旧来的な態度を変えていくべきだと感じている。
- ・現代アートを介さずとも、町おこしのイベントは開催できる。それにも関わらず、地域住民があえて現代アートを主軸に街おこしの継続を選択するのであれば、地元住民が現代美術を理解するための仕組みや環境をしっかりと整えることが急務であると感じている。
- ・アートプロジェクトで地域と関わる際には、異なるものをつなげる技術が必要で、表現に説得力がないといけない。アートとは違う言語で話しながら、一般の人々の土俵に入り込むことが重要である。
- ・キュレーターをはじめとするアート関係者は、アート以外の専門性や職種の人との対話の場をいかに設けるかを考え、可能性を模索していくべきである。

4)キュレーターの役割

発言のポイント

- **キュレーターの多くは、現在、定まったキュレーターの役割は存在しない、役割は多様であるべきだと考えている。**
- **キュレーターの役割としては、例えば、「展示による新しい視点・価値観の提示・問題提起」、「作家の表現活動の翻訳」、「美術界とその他の業界の接続」等が挙げられる。**

意見交換会・個別にアリングでの意見

- ・ 同じキュレーターという職業でも、美術館やアートセンター、市役所といった所属機関、施設、部署、その所在地によって役割が違うことを理解することが重要である。
- ・ キュレーターの意味が日本ではまだ曖昧だと思っている。時代を象徴し、思想をリードし創造するのがキュレーターなら、アートかどうかは関係がないと思っている。
- ・ キュレーターとは、捉えどころのない、実体のない言葉だと思っている。だからこそ、もっと多様なあり方があって良いのではないか。
- ・ 自分はこれまでキュレーターではなく、コーディネーターと名乗ってきた。キュレーターは、**思想**をもって何かをつくろうと、枠組みを堅固に組み立てる人だと思っている。
- ・ キュレーターと学芸員は違う。学芸員は基本的に美術館の倉庫番である。コレクション展示内容や展示手法によって**新しい視点・価値観を提示する**のもキュレーターの仕事かと思うが、学芸員は雑芸員とよく呼ばれるようにタスクが多岐に渡るし、場所に縛られている。
- ・ 海外ではキュレーター、エデュケーター、レジストラ等と細分化されている。今所属している美術館での自分の仕事は、キュレーターというよりは学芸員だと思っている。人的余裕もないので、お金の支払い業務以外は全て学芸員がやらなくてはならないのが現状である。
- ・ 私は作家が表現するものに関する翻訳作業がキュレーションだと思っている。美術の知識が無い人に少しでもわかりやすくするために翻訳するが、全てを言葉で翻訳すれば面白いというわけではない。展覧会や作家の意図を汲み取って、語る作業をどこで寸止めするかというコントロールを行うのがキュレーションではないかと思っている。
- ・ 自分の感じる違和感や気持ち悪さ、快感を疑問に思っ社会に問いかけていくことができるのがアーティストやキュレーターの仕事だと思っている。自分が面白いと思ったものを沢山の人のに見てもらいたいと思う気持ちは、キュレーターというよりはプロデューサー的な立場ではないかと思う。
- ・ 私が過去にアートプロジェクトで働いた経験に基づいて言うと、**キュレーターは展覧会の方向性を決めて、世界中を飛び回ってアーティストを選定し、作家と一緒に作品をつくり、かつ現場で作品に落とし込むためのサポートをする仕事である。**
- ・ 今後のキュレーターの役割は、自分が構想設計することで、**これまで関係性のなかったもの同士のつながりを持たせ、それを拡張することで、これまで見えなかった価値を提示すること**だろう。業界の言語で話をするのではなく、外部に開かれた言語でいかにネゴシエーションできるかが重要である。
- ・ キュレーターをはじめとするアート関係者は、アート以外の専門性や職種の人との対話の場をいかに設けるかを自覚的に考え、可能性を模索していくべきである。
- ・ キュレーターという言葉の定義自体が曖昧である。キュレーターという職能の社会的認知が、いまだ発展途上段階にある。制度にも、改善の余地が大きくある。

2-2. 将来への展望

キュレーターへの個別ヒアリングでは、彼らが今後どのようなキャリアを志向しているのかを把握している。これらの結果を、「1）目指すキュレーター像」、「2）国際的な活動への関与意向」の視点からまとめている。

1) 目指すキュレーター像

発言のポイント

- 若手・中堅のキュレーターは必ずしも国際的に活躍する有名キュレーターを目指しているわけではない。
- キュレーターとしての新たな活躍の在り方の構築を目指し、模索している状況である。

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・ 上の世代の方々が築いてきた方法論に頼らず、いかにサバイブしていくかを考えたいと思っている。北川フラム氏、中村政人氏、南條史生氏、長谷川祐子氏に代表されるような上の世代の方々も、国際的な視点を担う人として悩みつつ模索してきたと思うが、逆にそのような道しかなかったという部分もあるのではないかと。今は新たな可能性、別なキュレーター像が見えてきたのではないかと考えられる。世代論になってしまうくらいはあるものの、対立概念ではなく、多様なキュレーターの姿、多様なキュレーションの在り方が見えてきたので、それを前提として議論する必要があるように思っている。
- ・ これまで我々は、首都圏を中心に、権威的なキュレーターの選出で海外展にピックアップされた者がピラミッドの頂点に立てるような構造で考えてきた。すでにそれは壊れつつあったのかもしれないが、震災によって決定的に壊れたと考えられる。
- ・ 今の日本のアートシーンは上の世代が作ったもので、その功績は非常に大きい。けれども私たちの世代は物事を大きくすることではなく、むしろ掘り下げていくことに興味がある。物事の規模の拡大ではなく、洞察と探究に費やしていきたい。
- ・ 業界内で理想像となるようなキャリアの方は特に存在しない。有名キュレーターはいるが、彼らになりたい訳ではないという認識が確実にある。
- ・ スターキュレーターには憧れない。
- ・ 上の世代の先輩キュレーターが実践した事を彼らと同じ方法論でやっても面白くはない。彼らがこれまでやってきた功績を別の角度から活かさないといけないと思っている。

2)国際的な活動への関与意向

発言のポイント

- 我が国においては各地域にコミットして活動を行うキュレーターが多く、全員が必ずしも国際展のキュレーター・コミッショナーを志向しているわけではない。
- 国外で活動する意向がない若手・中堅のキュレーターも多い。また、国外での活動を望む方々のなかにも、欧米よりもアジアを志向する方も多く含まれていた。

意見交換会・個別にアリングでの意見

- ・ 果たして国際展に参加することが活躍を意味するのかについては、その前提を根本的に考えなければならない。
- ・ 国際展を実施したいとは思わない。 オーダーがあれば考えるが、自分で外に打って出ることによりあまり興味はない。アートを独立したものとするなら商品のように外に出すことになるが、土地とともに発生すると考えると、海外で発表の機会を与えただけではうまく機能しないのではないかと。アーティストに限らず、キュレーターにも同じことが言える。ただ単に国際展に参加してキュレーションしてくれと言われても何もしようがない。
- ・ 地域の魅力、未来に価値となり得る地域の財産を発見していくことを大事にしている。私が活動している街ではあくまでドメスティックに、地域の人たちがアートを味わう、地域を発見するプログラムを目指している。 急に国際発信となっても、いかに地域と海外を両立していくべきかが難しい。
- ・ 場所に作品を設置していく黒船的なものよりは、民俗学的・文化人類学的な、精神性や儀式といった要素を含めたキュレーションのニーズが1世代前よりも高まっているのではないかと。
- ・ 国外で仕事をすることはあまり考えていない。
- ・ 私は英語ができないので、海外を飛び回るキュレーターとして働くより、アーティストによりよい制作環境、よりよい生活環境を提供できるようにサポートしていきたい
- ・ 海外で働きたいという気持ちはない。日本人なので、今後も日本のために何かやりたい。
- ・ 近年は、正規職員として国外で収入を得ようという選択肢はなくなったと考えている。
- ・ 今すぐにはわからないが、機会があれば海外で働きたい。アジアがすごく面白いと思っている。変化している場所だと感じている。

第3章 現代美術のキュレーターの活動に係る課題

3-1. 課題の全体像

指摘された様々な課題や問題点を、大きく「キュレーター個人に関する課題」、「キュレーターを取り巻く環境の課題」、「その他の問題点」に分けて整理している。課題と問題点の全体像は次図のとおりである。次節以降では、それぞれの発言のポイントと、意見交換会・個別ヒアリングにおける具体的な意見を整理している。

図表・13 課題の全体像

3-2 キュレーター個人に関する課題	1) キュレーターの活動に対する公的支援の充実 2) 業務に必要な調査に伴う費用(交通費、等)の支援 3) キュレーターの職能の理解不足に伴う安価な業務依頼の改善 4) 留学にあたって活用できる助成の充実 5) キャリア形成について考える機会の付与 6) キュレーター間の議論の機会の充実
3-3 キュレーターを取り巻く環境の課題	1) 多言語による情報発信 2) 現代美術のコレクションの整備 3) 行政担当者の理解促進 4) 有期雇用による人材の流動性の高さの改善 5) 小規模な団体でも応募が可能な助成の充実 6) 助成の申請・事務処理に係る煩雑性の低減 7) 先進的な評価手法の開発 8) 長期的視点での支援 9) キュレーター育成に係る大学における幅広い人材の育成
3-4 その他の問題点	1) アートプロジェクトの限界 2) 創造都市政策の限界

3-2. キュレーター個人に関する課題

キュレーター個人に関する課題として、「1）キュレーターの活動に対する公的支援の充実」、「2）業務に必要な調査に伴う費用（交通費、等）の支援」、「3）キュレーターの職能の理解不足に伴う安価な業務依頼の改善」、「4）留学にあたって活用できる助成の充実」、「5）キャリア形成について考える機会の充実」、「6）キュレーター間の議論の機会の充実」などが指摘された。

1)キュレーターの活動に対する公的支援の充実

発言のポイント

- 文化庁の支援はアーティストを対象としたものが多く、キュレーターなどのアーティストを支える人々を対象としたものは不足している。
- また、特にインディペンデントのキュレーターが対象となるものが少ない。

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・ アーティスト以外の専門家にも国から支援をしてほしい。個人に対する国の支援として、新進芸術家海外派遣制度しかない状況は脆弱である。国は助成金の種類と数とタイミングを増やすべきではないか。中長期の助成金が今以上に必要だと考える。
- ・ 拠点を持つハウス・キュレーターに対しては在外研修等の制度が用意されているものの、フリーランス・キュレーターや任期付き職員などの中間領域の労働者に対する基盤が少ないのが問題である。この仕組み作りができると環境改善につながるのではないだろうか。
- ・ アーティストはそれぞれ世界に出て活動している。問題は、彼らの活動を支えるスタッフ側の人材の往来を刺激するような支援がないことである。
- ・ 作家支援や作品制作支援のシステムはあるが、作家と一緒に作品をつくり上げる若手のプロデューサーやキュレーター、ディレクターに対する支援システムが少ない。
- ・ 作家たち、クリエイターへの支援はレジデンスや在外研修など充実している。しかし、彼らとペアになって、彼らの活動をお膳立てしていくキュレーターやプロデューサーをはじめとする職能への支援が少ない。
- ・ とりわけ日本では、ミッドキャリア以降のサポート体制が十分ではなく、文化庁なり国からの支援や、その改善を求めたい。
- ・ 日本のアーティスト・イン・レジデンス・プログラムのほとんどはアーティスト対象のプログラムなので、リサーチャーやキュレーターが応募できる枠を各機関が増やすべきである。同時に、助成制度も拡充できれば良い。

2)業務に必要な調査に伴う費用(交通費、等)の支援

発言のポイント

- キュレーションを行うにあたって、日常的な取材・調査が前提となるが、それに伴う費用(交通費、等)が所属から支払われず自己負担となっている。
- 所属組織による負担の徹底(文化庁の通達、等)が文化庁による支援制度の整備が求められている。
- あわせて、キュレーターはアーティストをはじめ様々な人々と交流を行うが、非正規のキュレーターも多く、必ずしも十分な収入を得られているわけではないため、交流に伴う交際費は大きな負担となっている。

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・ 全国各地を調査するための取材・調査費を支援してほしい。具体的には、作家ではない人をリサーチしに行く際の交通費等である。
- ・ 調査や鑑賞といった次につながる可能性を含んだ事柄に行政からお金が出ず、本人がその分を負担している方がとても多い。
- ・ 行政側が学芸の専門性を適切に認知していないので、研究時間の確保が困難で、かつ年間の調査費も少ない。展覧会実施のためには数年前からの調査が必要だが、実際は展覧会が決まらないと調査費を得られない。自費で公休日に対応しているのが現状だが、自分の目で作品を見に行くことが基本でありながら、それがおざなりになっていることに危機感がある。就業時間に研究や論考を執筆する時間が確保できず、時間外に努力するしかない。
- ・ 現在、私が勤務している場所のデメリットは東京から遠いこと。東京から往復3万円、関西からは6万円ほど要する。現在は、調査費を自分で支出しなくてはならないので、国内のリサーチの渡航費、旅費に対する助成がほしい。
- ・ 調査研究に係る交通費支援があればよい。現在、私が勤務している場所から上京すると正規料金で往復4万円程がかかり、私費負担が重なるとつらい。
- ・ 調査のための出張費が出ないにもかかわらず、海外作品を中心とした展覧会の企画を求められる。展覧会開催が決定してからでないと出張できず、調査のみでは認められないため、他の展覧会を運営しながらスケジュールを調整し、自費で対応しなくてはならない。学芸員の専門性が認知されていないため、調査費も少ない。
- ・ 過去に従事していたプロジェクトでは出張費が出てリサーチができたが、現在従事しているプロジェクトでは海外のリサーチを自費で行わねばならない。
- ・ 海外への調査は4回に1回くらいの割合でしか公的な出張扱いとならない。休みを取って自費で行くことの方が多い。基礎調査に出張費は出ない。
- ・ アーティストと交流をする際には飲食が伴うことが多い。日本では公的資金で飲食をすることにながりの抵抗感があるが、交際費の問題が少しずつ解消されていけばよいと思っている。
- ・ 携わっているプロジェクトいつ終わるか分からないという不安定な状況下で、相談と称する飲み会の出費が深刻な問題である。
- ・ 飲み会の出費が大きい。人のコーディネートのために給料のほとんどが消えている。

3)キュレーターの職能の理解不足に伴う安価な業務依頼の改善

発言のポイント

- **キュレーターという役割及び専門性が、行政担当者をはじめとした人々に十分に認識されておらず、安価な水準で業務を依頼される傾向にある。**

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・ キュレーターという言葉の定義自体が曖昧である。職能の社会的認知が、いまだ発展途上段階にある。制度にも、改善の余地が大きくある。
- ・ キュレーターという言葉自体が知られていないので、その認知とともに、高い給与を得て当然である仕事だ、と思ってもらえるようにしたい。謝礼の相場も定まっていない。医師や弁護士と同様に胸を張って良い仕事をしている筈なのに、適切な報酬額を受け取っていないように感じている。とはいえ、強気で増額を訴えれば仕事を断られる恐れもあるし、キュレーターという仕事を嫌いになって欲しくもないので、低めのレートで仕事をせざるを得ない。この状況を続けてしまうと次世代にも悪影響が及んでしまうだろうと思い、申し訳ないと思っている。
- ・ キュレーターへの根本的な理解がないため報酬の基本水準が低い。根本的な底上げが必要である。
- ・ コーディネーターやエデュケーターといった中間領域の職能を持つ人材のスキルやネットワークが活かされておらず、能力に見合った待遇がない。社会がこういった職能を認知していかないといけない。
- ・ キュレーターに関して、キャリアを報酬金額に換算するための指標がない。行政がキュレーターのフィーを設定する際、適正価格の判断基準が存在しない。
- ・ フリーランスのキュレーターを続けるのは経済的に難しい。ビエンナーレやトリエンナーレのキュレーターを続けても、イベント屋になってしまうだけではないかという危機感がある。日本はビエンナーレ・トリエンナーレ産業が成熟していない。ビエンナーレやトリエンナーレが正確に理解されていないため、イベント屋だと勘違いされかねない状況である。
- ・ アートを仕事にしている人は収入が低すぎる。自分が運営する組織では収入を増やし、しっかりと雇用してプロとして活動できるようにしたい。
- ・ 美術が好きならボランティアで仕事をしてくれるという考え方がいまだに根強い。キュレーターは専門知識を売ること生活しているということが理解されていない。
- ・ キュレーターの収入を担保することが重要である。若者でもある程度を支払う。その習慣ができないと、都合の良い部分への関与だけ求められる。

4)留学にあたって活用できる助成の充実

発言のポイント

- **文化庁の新進芸術家海外研修制度は現代美術の現場にも普及しているが、支援対象としてキュレーターの比率が低いと捉えられており、拡充が求められている。**

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・ 依存は良くないが、文化庁の支援は大事だと思っており、特に在外派遣研修は有り難い。
- ・ 日本では、行政の文化支援が充実しているのではないかと。私自身、在外派遣研修で1年間ニューヨークに滞在した。長期間滞在できる支援制度は、他国では珍しいものである。支援策はあるものの、仕組みが固定化されて、柔軟な対応ができない状況が問題なのかもしれない。
- ・ 新進芸術家海外派遣制度は、若手作家支援を目的につくられた古い制度で、アーティストではない芸術の専門家が増えている現状に対して適切なものとは言えない。
- ・ 文化庁の新進芸術家海外研修制度に応募したいと思っているが、応募締め切りの時期が早いのが難点である。特に短期のものは、フレキシブルに対応できるよう申請時期を3、4ヶ月前くらいにしてほしい。 中間組織が入って窓口になれば公募、審査の時期を調整することも可能なのではないかと。

5)キャリア形成について考える機会の付与

発言のポイント

- **キュレーターの多くは、慢性的な人員不足の環境で従事しており、日々の業務に忙殺されていることが多い。**
- **このような環境の中では長期的なキャリアを検討することが難しく、何らかの機会の付与を必要としている。**

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・ 目の前にある事をこなすことに必死で、中期的なビジョンを持ってないのが現実である。
- ・ 現場スタッフとして勤務していると日々の業務に忙殺され、自分自身のキャリアや事業の今後あるべき方向性などを考える時間的余裕が一切ない。
- ・ (プロジェクト名) を離れたくなった理由は、研究調査する時間がなかったから。
- ・ (団体名) に勤務していた時代は休みが無く、インプットができなかった。
- ・ 美術館に勤めて、そこで1年間研修によって現場を抜けるのは難しい。不在時の人員補填もほぼない状態で、無理矢理自分の仕事を調整し、大規模改修に伴う休館などのタイミングを見計らうなどの根回しをしないと、外に出て学習する機会が得られない。

6)キュレーター間の議論の機会の充実

発言のポイント

- 夫々のキュレーターは互いの存在を認識しているものの、本事業で実施した意見交換会のような本質的な議論を行う場は十分に持たれていない。
- 文化庁が定期的に意見交換会を開催し、キュレーターのネットワークを強固にするとともに、意見交換会での主な意見が公共政策に反映されることを期待している。

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・文化庁によるキュレーターのヒアリングや意見交換会は良い機会になる。これまではキュレーターが横のつながりを持てるような場が設定されてこなかった。各人が様々なことを考えていても、その内容を真剣に話し合う機会がなかった。
- ・今回のキュレーターヒアリングおよび意見交換会の事業は、今後のキュレーター育成にとって非常に意義深い活動だと思っている。
- ・今回のような同年代のキュレーターが集まり、意見交換を行う場を設けることは、相互の活性化につながり有効であると思う。
- ・プロではない行政の方々が有識者の調査報告を頼りに、間違いや欠落した情報に気づかずに政策を行うと、遅れてその影響が生じてしまう恐れがある。このようなボトムアップだけではどうしようもない問題をフォローするためにも、今回のような意見交換会が継続的に開催され、現場の声が確実に伝わっていけば良いと願っている。
- ・アートに限らず、公的機関からの多角的で草の根的な、きめ細やかな支援は、文化的土壌を守っていく意味でも必要である。文化庁には、引き続き今回のように十分な時間を確保して、各地方の現場のヒアリング、意見交換会を実施してほしいと思っている。
- ・美術の業界人は文化庁に直接相談しに行かないため、今回のように、利害関係ではないコンサルタントが間に入るのは良案だと思う。今回の意見交換会のように、アートに関わる人たちが議論する場があると有益だと思う。キュレーターや中間領域で働く人間は、ともに現状の業務をこなすことで手一杯で、きちんと腰を据えて話す機会がほとんどない。学芸員向けに美術館連絡協議会や全国美術館会議はあるが、中間領域の人間たちが集まり議論する機会はない。
- ・今回の意見交換会は、良い企画だと思っている。自分は東京以外の地域の活動を余り知らず、限定的なエリアの人脈しか持っていないので、自分が見えていない部分のキュレーターの意見を知ることができる好機だと考えている。

3-3. キュレーターを取り巻く環境の課題

キュレーターを取り巻く環境の課題として、「1）多言語による情報発信」、「2）現代美術のコレクションの整備」、「3）行政担当者の理解促進」、「4）有期雇用による人材の流動性の高さの改善」、「5）小規模な団体でも応募が可能な助成の充実」、「6）助成の申請・事務処理に係る煩雑性の低減」、「7）先進的な評価手法の開発」、「8）長期的視点での支援」、「9）キュレーター育成に係る大学における幅広い人材の育成」などが指摘された。

1)多言語による情報発信

発言のポイント

- 現在、国内の批評(カタログ、書籍、等)の多言語対応は必ずしも十分ではない。
- 有能なアーティストの国際的な発信を下支えするために、多言語対応への公的な支援が求められている。

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・私が行政や国に求めたいのは、英訳に対する公的支援である。日本国内にも優れた論考や批評が多くあり、それらもアーティストの活動を下支えするものである。したがって、それらの英訳作業に対して助成金が充てられてば、例えそれが単年度会計の支出であろうとも、1年というスパンに留まらない長期的な効用を伴う投資になると考えている。批評家を育てるよりも、既にある批評の現場を翻訳し、外に対して「見える化」していくことが必要である。
- ・理想的な情報発信は日英中のトリリンガルであり、多言語で文脈をつくる必要がある。情報発信に関しては、バイリンガルの資料があると、海外の美術館やキュレーターを相手にするときに話が早い。特に作家は、バイリンガル資料で情報発信することが必須である。私に関わった展覧会のあとも、バイリンガルのカタログをつくったことで、フランス、シンガポール、韓国等から問い合わせが来た。
- ・学芸員が扱うコレクションが特定の地域にしか関係ないものであれば、閉じたものになる。コレクションをするならば、日本の中で完結するのではなく、全て英語で情報発信をして、世界中から人々が集まり、面白かったと言われるような展覧会を実施すべきである。
- ・日本の批評家の活動が国内に留まっているのは、言語の問題があるからである。バイリンガルで批評を書くことの困難さがある。

2)現代美術のコレクションの整備

発言のポイント

- 近年、日本の美術館の作品購入予算は限られたものとなっており、また、評価の定まっていない現代美術作品の購入には積極的ではない傾向がある。
- また、既に存在するコレクションは日本の各地に分散しており、国内外の人々が日本の現代美術のコレクションを体系立てて鑑賞できる場が不足している。
- その解決策として、ナショナル・コレクションの整備、各美術館が有する美術品情報の整備等が求められている。

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・ 日本が海外発信できない大きな要因は、発信の前段階となる適切なアーカイブがないことである。 私からの提案としては、首都圏がコレクションを中心に行い、地方がクリエイションを担うことである。 ナショナル・コレクションが脆弱だと発信力も曖昧だが、しっかりとしたコレクションを保持すれば海外への発信として巡回展をする意味も現れる。新たに施設や機関を作る必要はなく、保管は地方美術館でも問題ないと思っている。
- ・ 道州制の区分でコレクションのビジョンがあってもよいかもしれない。
- ・ 作品購入は、作家支援という観点からも有効である。 作品を年に1つ買うだけで作家の生活がどれだけ助かるかという現実を是非知っていただきたい。
- ・ 作家にとっては作品の購入が一番の支援になる。 それも、美術館といった公的機関が購入するのが望ましい。
- ・ 私は「現代美術を観るならばここだ」という柱になるようなメイン・エリアが国内にできたら状況は変わると思っている。 「そこに行けばあの作品がある・見られる」といった、目当てになるようなものがあるからこそ、そこを拠点に人材交流のネットワークができるし、組織間を横断する活動への可能性も高まるのではないかと 思っている。そういったメイン・エリアの存在によって、私が実践しているようなオルタナティブな活動もより生きて見えてくるように思っている。
- ・ 日本国には現代美術に係る象徴的なショーケースが不足している。 例えば、東京都現代美術館は東京のはずれにあるし、ギャラリーもどこに行けばよいかわからない。一定の作品がまとまっている場所が必要なのではないか。 必ずしも公的な資金で整備するのではなく、ファンドを作って、それでコレクションの購入・運用ができないものか と思う。

3)行政担当者の理解促進

発言のポイント

- 地方公共団体の行政担当者の多くが現代美術に理解を示しているわけではなく、また、理解を促進しても定期的に異動が発生する。これが、キュレーターにとっては行政との協業・連携における大きな障害となっている。
- 1つの解決策として、地方公共団体の行政担当者向けの教育プログラムの充実が求められている。

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・行政側の担当者は3年に1度は異動があり、かつ専門性も無い分、労働環境や予算の組み方が把握しきれずに現実と大きく乖離した施策が生まれる部分がある。それを現場で調整するのは大変なストレスである。例えば、本当は必要な人員が配置されていない状況が行政に伝わっていない。対策しきれなかった自分たちへの反省にもつながるが、行政側で改善せずに現場に丸投げされてしまうのが問題である。
- ・役人は3年ごとに異動する。苦しい状況であることは確かだが、逐一説明していくしかない。システムだから仕方がないと思っている。たまたま赴任した担当者がアートに理解があることを都度祈るくらいしかできない。
- ・行政の担当者が変わるたびに逐一説明しなければならないのは、仕方がないこととはいえ、非効率である。アートは専門化された分野だと思うので、行政にはそれを分かってもらった上で、信頼して欲しいと思う。一度予算を預けてくれたならばしっかり信用して口を出さずに最後までやらせてほしい。
- ・現在、県から予算を獲得し、行政職員の文化化を行うプロジェクトを立ち上げようとしている。例えば、昔から人権の研修プログラムを特定単位受けなくてはならないという義務があるが、それに倣い、文化化に向けた職員研修を実施しようと試みている。今、一番文化化が必要なのは行政職員である。
- ・各自治体職員向けの教育プログラムが必要だと思っている。理解力のある人を育てないと、現場でどうにかしようとしても限界がある。自治体向けの教育を全面的に文化庁が担ってくればよいのではないかと思っている。

4) 有期雇用による人材の流動性の高さの改善

発言のポイント

- **施設やアートプロジェクトに従事するキュレーターの多くは、有期雇用であり、人材の流動性が高いため、個別の施設やプロジェクトにノウハウが蓄積されないことが問題となっている。**

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・ キュレーターやそれに準ずる職能に就く人々は、任期付の非正規雇用で働いている人が多く、任期を終えるたびに人が移動し、それまで構築してきた人脈やスキルが無くなってしまうのが非常に惜しい。任期付非正規職員として現場の最前線に立つ方々ほど、いろんな経験を積んでおり、アーティストや地域にとって大事な業務を担っている。彼らの職能の認知と労働環境の改善、生活の安定が急務であり、公的措置が必要であると考えている。
- ・ ビエンナーレ産業における雇用問題の解消が喫緊の課題である。私が関わった国際展についていえば、開催年のみの短期的な求人、かつ即戦力となる人員に特化した採用のみとなるため、継続的な人材育成につながらないし、慢性的な人材不足の問題は解決しない。芸術祭が終了するたびに人材が流出し、彼らの培ったスキルと人脈がリセットされてしまう。
- ・ 雇用形態の不安定さが問題である。ビエンナーレ産業では、どこかで何かしらの経験を積んだ体力のある若手の即戦力を求めるのが常である。求められる人材には技術者やエデュケーターも含まれるが、実際には現場をつくる実働部隊は必ずしもアートの人でなくてもよい場合を見受ける。技術者や現場監督の仕事は、美術を知らない方でも十分対応できるものである。

5)小規模な団体でも応募が可能な助成の充実

発言のポイント

- 現在、文化庁及び地方公共団体の支援は部分助成が多く、その場合、団体の持ち出しが求められる。さらに、精算払いの仕組みと相まって、資金力のない団体は助成を活用できづらい状況である。
- 解決策として、全額助成や中間払い制度の充実、1件あたり助成額の少額化等が求められている。
- そのほか、キュレーターの人件費が助成対象経費とならない場合もあり、対象経費の拡張が求められている。

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・ 日本の公的資金における助成制度の一番の問題点は、基本的には後払いであることである。事前に支払ってもらわないと、運転資金が小さい組織は助成金すら受けられない。ランニングコストとして日々必要な部分は補填できないようなシステムとして組まれており、人員もアルバイトレベルしか雇えない状況である。
- ・ 出展作家の謝礼が後払いであるため、特に通貨の安い国から来日している若いアーティストは、展示のために急な出費が生じても対応できない。例えば、展示に必要なプロジェクターといった機材什器が急に必要になる場合が多い。
- ・ 単年度で500万円の支援ではなく、5年間を通して500万円を支援する等、小規模なスペースやプロジェクトに対する助成制度ができれば、もっとアートや芸術文化が豊かになるのではないかと考えている。文化庁のレジデンス助成は500万円と高額で、後払いとなると私のような小さな組織では事業を作ることができない。100万、200万くらいの助成があると良い。
- ・ 私たちも文化庁をはじめとする各助成団体から助成金を頂いているが、文化庁の助成金は1/2助成が多いため、大きなフェスティバルを開催しようと多額の自己資金を調達しなければならない。そのため、事実上フェスティバルを開催できる団体が限られてしまい、新規参入が難しい状況が生まれている。
- ・ 何かを企画して実践したい、あるいは思い描いたあるプランを特定の地域でやりたいと思い立った際に、ミクロな活動に即したサポートがあれば、今よりも新しい企画が数多く実現され、地域も活性化されていくのではないかと。
- ・ 助成金申請では、事務局の人件費がカバーされないことが一番の問題である。助成金を出すことによって、美術関係者が食べていける環境を作る、ということを実現しなくてはならない筈である。アートプロジェクトをやればやるほど事務局が疲弊してしまい、根絶やし状態になるのは本末転倒である。不正につながりやすいからこそその制約が存在するのだと思うが、どうにかクリアしてほしいと思っている。

6)助成の申請・事務処理に係る煩雑性の低減

発言のポイント

- 助成の申請や採択後の事務処理の煩雑性が指摘されており、可能な部分の効率化を求められている。
- また、文化庁の助成の種類が多いことが、申請の負担を増大させているとの指摘があった。

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・マンパワーやお金を使わずに済む仕組みを作って欲しい。芸術文化振興基金等から支援を得ると、伝票を全て保管する必要がある。数年ごとの監査の際には、数年前の事業の伝票が1枚ないだけでも探し当てなければならない。不正防止の手続きではあるが、時間をかけない効率的なシステムも大事だと思っている。
- ・助成金のスキームの異常な多さと書類対応が面倒極まりない。本来はスキームにあてはまらないところを無理に工夫して申請している。文化庁や国際交流基金をはじめとする助成制度はいずれも申請フォーマットやプログラムに合わせるよう枠が決まっていて、その枠に当てはめるのが難しい状況である。海外へ助成申請する際は、プレゼンテーション・レターを作成し、現地に依頼すれば助成金を獲得することが出来る。

7)先進的な評価手法の開発

発言のポイント

- **アートは定量的に評価できない部分が大きいことを認めた上で、その効用を対外的にアピールするための先進的な評価手法の開発が求められている。**
- **また、その手法の開発においては公的な支援を行う必要があるとしている。**

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・ 芸術の効果は、定量的には測れない。私が関わった国際展では、投入資金に対して入場者数が少なかったことで、開催効果が低かったという厳しい外部評価を受けた。実際に展覧会を見に訪ねた来場者数や周辺地域に与えた経済効果といった金銭と人間の数では測れないものをどのように説明していくのが私たちの課題である。それらを定量化できるものさしが必要で、それは企業からも求められている。
- ・ アートというと彫刻、絵画に帰着してしまうが、アートは様々な部分で有益なものである。今後は、高齢者が生き生きと生活していくために重要なものではないか。そのためには、定量的・定性的な評価も重要になってくる。
- ・ 大小問わず頻発している国内のアートプロジェクトも、一度始まった限りは中長期的視座によって存続させ、適切な評価基準に基づき成果を分析していく必要があると考えている。そこに対する公的支援を希望している。
- ・ シンガポールの美術館に勤めて初めて「KPI（Key Performance Index）」という言葉を知った。展覧会などの様々な事業でどれだけの動員数や満足度を得られたか、国際的に認められている美術雑誌でどれだけレビューが掲載されたか、などを数値で示さなくてはならない。この達成度は自己評価も含めキュレーターが設定しなくてはならない。とても企業的である。
- ・ キュレーターから提示できる成果や情報と、経済学的専門家から見た数値化された情報の両方があればよいのではないか。
- ・ アートが無いことによって生じるリスクやデメリットをもっと意識してもよい。それを数値化して提示する方法論を検討すべき。
- ・ アーティストの作品あるいはアクティビティのトラッキング、事後評価がないのが問題。キュレーター・批評家の活動も同様である。例えば、文化庁の助成を得たアーティストが海外に赴いても、何をしているかよく分からないし、レジデンスで日本に来た作家がその後も活躍しているのかも分からない状況が続いている。作品名・作家そのものの活動の度合い、キュラトリアルという言葉等が正しく効果を発揮しているか否かを評価する手法が絶対的に必要だと思う。その評価が今後の財源につながるのであれば、先行して実施してもらった方がよいと思っている。

8)長期的視点での支援

発言のポイント

- **成果が生まれるまでには時間がかかるという芸術の特性を踏まえ、単年度ではなく、中期的(3～5年)な継続性を前提とした公的な支援が求められている。**

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・ 提案が採択された場合には、せめて3～5年は信用してもらったうえで支援を受けながらプログラムを作っていけるようになればよいと思う。
- ・ 中長期計画に対する投資や公的資金のサポートが足りていない状態でプロジェクトを運営しなければならない。文化やアートといったものは成果が出るまで時間がかかるが、国内では専ら単年度会計を背景として成果を求められてしまうので、結局、入場者数や地域への経済効果といった数値でしか検証される余地がない。
- ・ 中長期計画に対する投資や公的資金のサポートが必要である。海外の企業では、5年単位で資金補償する事例も少なくない。
- ・ 単年度で500万円の支援ではなく、5年間を通して500万円を支援する等、小規模なスペースやプロジェクトに対する助成制度ができれば、もっとアートや芸術文化が豊かになるのではないかと考えている。(再掲)
- ・ 特にレジデンス事業では1年限りの関係では終わらず、継続的な発展がある。単年度会計に基づく1年限りの支援ではなく、継続性を考慮した支援があるとよいと思う。
- ・ 単年度会計制度はアートのあり方にとって適切でない。特にビエンナーレやトリエンナーレの場合、数年に渡って事業を続けることが前提となっているにも関わらず、会計的には単年で縛られることが障害になっている。

9)キュレーター育成に係る大学における幅広い人材の育成

発言のポイント

- **芸術大学をはじめとした教育機関において、美術だけにとどまらない幅広い知識を持ったキュレーターの積極的な育成の必要性が指摘されている。**

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・ 美大で習った事は欧米の事が中心だった。その外部にある様々なフィールドに接近する事は、大学では難しかった。本来もっと選択肢があってよいのではないか。美大では政治学や社会学の授業がなかったが、それもまた重要ではないか。
- ・ 作家をサポートする人間をもっと増やしていかななくてはならない。教育の場でキュレーターを目指す人材を積極的に育成すべき。
- ・ 文化にかかわる人材については、より俯瞰的な視野をもって育成していく必要がある。文化庁の大学活用事業で地方大学がアートマネジメントの人材育成プログラムを実施しているが、機能しておらず中途半端な状況が散見され、また教える側もアートマネジメントを適切に理解しているとは言い難い状況である。
- ・ アートのキュレーター等をもっと俯瞰的に育て上げないことには人員不足解消や質の向上は期待できない。キュレーション、ディレクション、プロデュースと言いはたくさんあるが、とにかく教育で全体的な底上げを実現しない限りは改善も難しいのではないか。

3-4. その他の問題点

その他に、アートプロジェクトや創造都市政策の構造的な限界に関する言及が多く行われた。

1) アートプロジェクトの限界

発言のポイント

- 「大地の芸術祭」、「瀬戸内国際芸術祭」等の成功事例に倣って各地で実施されているアートプロジェクトでは、関わったアーティストも疲弊することが多く、継続可能性があるモデルであると見ていない方々が多い。

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・国内外の著名アーティストを招聘し、作品展示するという意味では「越後妻有アートトリエンナーレ」を初めとするこの10年間で開催されているアートプロジェクトの殆どは何ら変わりなく、形骸化している。
- ・アートの現場は「外」が面白いということで、私たちのおよそ2世代前からオフ・ミュージアム的なキュレーションが始まり、それが「瀬戸内国際芸術祭」等で実践され、セオリーとして成立していった。しかしその巨額を投じたモデルが破綻するとなると、私たちの世代が解決しなければいけない問題となってくる。
- ・瀬戸内芸術祭や越後妻有アートトリエンナーレといった成功事例が出てきていることもあり、地方でアートプロジェクトが有象無象に頻発する中、なんでも「やればいい」状態になっているのは問題なので、早く淘汰されればいいと思っている。
- ・地域アートが流行しているが、「なんでもあり」があまりにも蔓延している。それに対して先鋭的な海外のビエンナーレもあるが、その中間のプロジェクトがない。キュレーター側も「表現におけるプロフェッショナル」とそうではないものを適切に識別して社会に織り込んでいかないと「なんでもあり」の蔓延は解消されないだろう。
- ・アーティストがアートプロジェクトに頼って生きている状況ではいけない。公的機関はフェスティバルをアーティスト支援と謳うが、アーティストは疲弊している。
- ・アートプロジェクトに関わったアーティストから聞く経験談や、全国で開催されていたアートプロジェクトを実際に視察する中で、廃校や商店街を舞台に展開される地域活性志向のアートプロジェクトには疑問を抱いていた。
- ・自分にとっては、地域のアートプロジェクトの多くが実行委員会形式を採用している実態が単年度事業の要因となっている。大学や文化施設の主催とすることによって、継続性が担保されたプロジェクトとして展開できるのではないだろうか。
- ・この先、地域系アートプロジェクトが続いていくのか疑問を感じる。美大のアートマネジメント系の新卒学生の働き口がないので、彼らが臨時職員などの雇用形態でそうしたプロジェクトに入り現場は回ってしまっている。本来、仕事ができる優秀なスタッフが3人でまわせることを、できない20人でやっているような現場が多いので、トラブルも多い。若い人たちの青春ややりがいに支えられている現場が多い。

2)創造都市政策の限界

発言のポイント

- 我が国においては創造都市論を基に、現代美術が各地の地域活性化の手段として機能することを期待され、各種政策が行われてきた。
- しかしながら、拠点整備やプロジェクトを実施するだけでは、その効果は限定的であることが次第に明らかになってきており、拠点間や産業と現代美術をつなぐ役割の人材の育成等が求められている。

意見交換会・個別ヒアリングでの意見

- ・創造都市論自体が間違っている訳ではないが、行政がその理論を導入してやろうとするやり方はすべて間違っている。創造都市論によって都市文化が創造されるのではなく、破壊されていく危険性を孕んでいる。そのリスクを行政も認識しなくてはならない。文化政策全般において、国や行政は、もはやヨーロッパで成功したセオリーを輸入し運用する時代ではないということに気づくことが必要である。
- ・私が携わったアートプロジェクトの期間中は「現代美術をやると街が活性化し、変わる」と誤解して多くの自治体が視察に来ていた。余りに多くの人たちがアートフェスティバルやアートプロジェクトを多産し、多くの劣化コピーのようなプロジェクトを頻発させた。そのようなプロジェクトでは市民にとっての上質な作品提供も困難となり、市民ひとりひとりにとっての現代美術との初めての出会いという貴重な機会を台無しにしてしまう恐れがある。私は、「アートが街に出たから何かが必ず変わる訳ではない」と明言し続けなくてはならないと思っている。
- ・アートプロジェクトに従事していくなかで、アートがあることによって街が元気になるということは幻想であると考えようになった。
- ・一般的にはクリエイティブ・シティという考え方は、アーティストを呼び、その後にクリエイター等が集まり、経済が活性化するという考え方だが、実際にはアートの力だけではそのような好循環が起らないことがわかってきた。医療や教育等すべての環境がバランスよく整備されていないと、移住を促すことは難しい。
- ・日本でクリエイティブ・シティが導入されるようになったのは、研究者や民間コンサルティング会社の研究員の方がイギリスの事例を現地調査して文化の多様性の保持や経済的に効果があると報告・紹介されたことがきっかけだが、イギリスでは実際は労働党のネットワークがあったからこそできたことで、クリエイティブではない問題が多分に作用していたはずだった。しかし日本ではその部分が省略されて紹介されてしまった。
- ・横浜市にできた各拠点はすばらしい活動をしているが、それぞれの役割が明確でない。拠点同士は組織的なつながりがなく、事業を運営する上での連携ができない。日常的に拠点同士をつなげ、創造都市の取り組みをまとめながら盛り上げるポジションがない。新しい産業が生まれる可能性を活かしきれていない。創造都市事業全体の中で、横浜市の各拠点の活動を整理し、つなぐ人材が必要である。
- ・アーティストと地域をつなぐ「共通言語」がないことが障害・課題になっている。アーティストと地域住民が共に意見を表明できる場をつくることも必要である。こうした場がないことが原因で、創造都市の事業と産業振興がうまくつながらず、アートプロジェクトとまちづくりの接続も十分にできていない。

第4章 国外のキュレーターによる我が国の認識

4-1. 調査概要

本調査メンバーがネットワークを持つ、国外の主要なキュレーターに対して電子メールによるアンケートを行い、我が国の現代美術に関する認識を調査した（2015年3月1日～3月31日）。調査では、以下の34人からの回答を得ることができた。

図表・14 アンケート調査への回答者

氏名	所属等
Adeline Ooi	アート・バーゼル アジア部門 ディレクター
Agung Hujatnikajennong	インディペンデント・キュレーター、レクチャラー
Alia Swastika	インディペンデント・キュレーター
Anca Verona Mihulet	インディペンデント・キュレーター
Beverly Yong	Rogue Art（マレーシア） ディレクター
Charles Esche	インディペンデント・キュレーター、作家
Charles Merewether	歴史家、作家
Clara Kim	インディペンデント・キュレーター
Davide Quadrio	Arthub Arthubasia 創設者・ディレクター
Enin Supriyanto	インディペンデント・キュレーター
Gabriel Ritter	ダラス美術館（米） 現代美術部門 アシスタント・キュレーター
Geraldine Araneta	フィリピン・アートフェア 創設者
Hammad Nasar	アジア・アート・アーカイブ リサーチ&プログラム長
Hyunjin Kim	アルコ・アートセンター アーティスティック・ディレクター
Jean-Hubert Martin	グラン・パレ国立ギャラリー（仏） キュレーター
Jessica Morgan	ディア芸術財団（米） ディレクター
Johnson Chang	Hanart TZ ギャラリー（香港） 創設者
Joselina Cruz	マニラ現代美術&デザイン・ミュージアム ディレクター
Judy Annear	ニュー・サウス・ウェールズ（豪） 写真美術ギャラリー シニア・キュレーター
June Yap	インディペンデント・キュレーター
Lars Nittve	M ⁺ （香港） エグゼクティブ・ディレクター
Lesley Ma	M ⁺ （香港） インクアート部門 キュレーター
Massimiliano Gioni	ニュー・ミュージアム（米） ディレクター
Michelle Ho	シンガポール・アート・ミュージアム キュレーター
Olivier Varenne	ミュージアム・オブ・オールド・アンド・ニューアート（豪） 副ディレクター
Ranjit HOSKOTE	批評家、インディペンデント・キュレーター、詩人
Reuben Keehan	ギャラリー・オブ・モダンアート（豪） キュレーター
Rhana Devenport	オークランド・アート・ギャラリー（豪） ディレクター
Ruth Noack	インディペンデント・キュレーター、作家
Sunjung Kim	国立アジア文化殿堂（韓） アジア文化情報 アーティスティック・ディレクター
Weng ChoyLee	国際美術批評協会 シンガポール部門 部門長
William Lim	CL3 Architects Limited（香港） マネージング・ディレクター
Yung Ma	M ⁺ （香港） 動画部門 アソシエイト・キュレーター
Zhenhua Li	インディペンデント・キュレーター

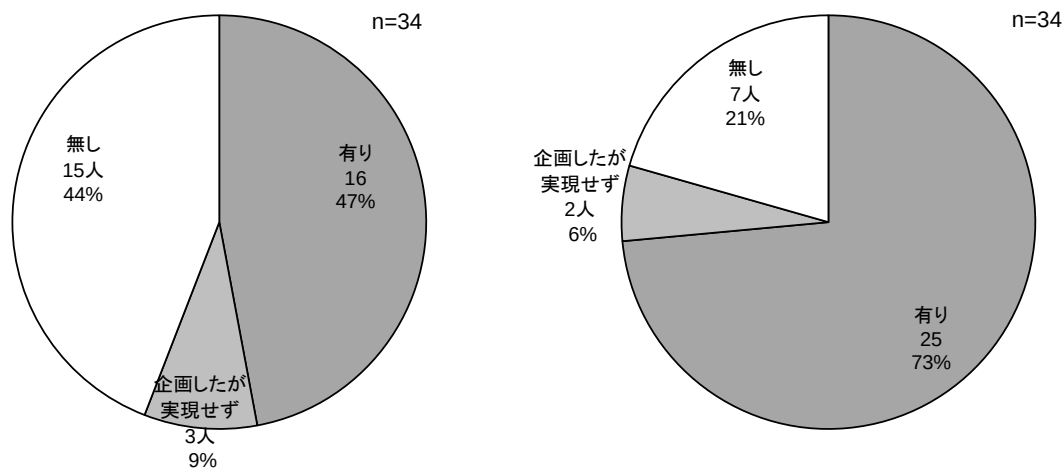
4-2. 調査結果

本節では調査結果として、調査対象者の「1）日本に関する展覧会の開催経験」、「2）興味を持っている日本人作家」、「3）日本に関して興味のあるトレンドや動き」、「4）日本の現代美術に関する展覧会を開催する際に障害や問題になりそうな点」、「5）日本の現代美術家に関する情報収集の方法・よく利用する情報源」、「6）日本の現代美術の状況についてリサーチをする上で不足しているもの」、「7）将来的な共同企画・協業への関心」についてとりまとめている。

1)日本に関する展覧会の開催経験

回答者のうち約半数が日本をテーマとした展覧会の開催経験があり、また、約7割が日本人作家を含むグループ展の開催経験を有していた。

図表・15 日本をテーマとした展覧会の開催経験（左）・日本人作家を含むグループ展の開催経験（右）



2)興味を持っている日本人作家

興味のある日本人作家として最も多く挙げられたのが「田中功起」で、回答者の約1/3が名前を挙げていた。そのほか、「大竹伸朗」、「杉本博司」、「高嶺格」、「荒川医」、「会田誠」、「さわひらき」等も3名以上の方が名前を挙げていた。

図表・16 興味のある日本人作家

作家を挙げた方の人数	作家名
11人	田中功起
4人	大竹伸朗、杉本博司
3人	高嶺格、荒川医、会田誠、さわひらき
2人	柳幸典、奈良美智、藤幡正樹、池田亮司、東芋、泉太郎、赤瀬川原平、菅木志雄、森山大道、笹本晃、ハイドレッドセンター、Chim ↑ Pom
1人	野口里佳、木村友紀、毛利悠子、堀尾寛太、米田知子、平良美樹、八木良太、萩原健一、入江早耶、田名網敬一、田附勝、天明屋尚、中平卓馬、中谷芙二子、千葉正也、石田尚志、森万里子、森村泰昌、松陰浩之、小谷元彦、小泉明朗、小西紀行、出光真子、狩野哲郎、篠田太郎、山口晃、佐藤圭、荒木経惟、栗林隆、金氏徹平、宮島達男、加藤翼、宇治野宗輝、ヤノベケンジ、やなぎみわ、もの派、ムラタ有子、ミカタジマ、ジュン・グエン=ハツシバ、アトリエワン、Shimabuku

3)日本に関して興味のあるトレンドや動き

日本に関して興味のあるトレンドや動きとして、ジャンルではビデオアート、パフォーマンス、写真等に興味を持っている方が多かった。そのほか、活動としては、「もの派」、「具体美術協会」等を挙げている方も複数存在した。

図表・17 日本に関して興味のあるトレンドや動き（回答群1）

- ・ 建築、近・現代ビデオアート
- ・ 日本のパフォーマンスアーティスト
- ・ ニューパフォーマンス、ビデオアート、写真
- ・ 20 世紀、21 世紀アヴァンギャルドアート、多分野アート、実験映画や舞台、音楽、アクティビストアート、平成時代のアート
- ・ 過去 20 年間のビデオアートの歴史ともの派ムーブメント
- ・ 具体、もの派、東京ポップ
- ・ 具体、スーパーフラット、プロテストアート、写真
- ・ もの派
- ・ 具体の時代や日本の現代美術全般についてもっと知りたいと思っている。映像（ビデオやニューメディア）、絵画、彫刻、パフォーマンス等。また、レジデンスプログラムや作家の作品制作・展示参加へのサポートを提供する団体等についても

また、日本の現代美術は独特であると認識している方が多く、日本の伝統との融合等に興味を持っている傾向がある。

図表・18 日本に関して興味のあるトレンドや動き（回答群2）

- ・ 地方で行われる他分野にまたがったサイトスペシフィックな芸術祭において、作家やキュレーター主導で創り出される現在のムーブメントにとっても興味がある。それは日本の現状にとっても非常に珍しいことなのではと思う
- ・ 現代美術全般。日本の美術はアジアでも独特だと思う
- ・ 私の興味の範疇がメディア・アクションアートだが、日本は西洋と東洋の融合したハイブリット文化に対して独特の視点を持っていると思う。そしてそれは現在の時間や身体に関するアートにも関連があるように思う
- ・ 日本は美学の長い伝統がある。私はコンセプチュアルな枠組みで学際的な作品づくりをする作家に興味がある。また、どのような様式が東京外から生まれているのか、地域性が日本の現代美術にどのように影響しているのか、等
- ・ 日本の伝統のある側面を現代美術に適応させる作品と作家に興味がある。例えば、天明屋尚の絵画や、会田誠。同時に毛利や萩原等、若い作家がいかにかこの「日本の伝統」から脱却し多表現をしているかにも注目している
- ・ 歴史的なムーブメントと現代美術の発展に興味がある

4)日本の現代美術に関する展覧会を開催する際に障害や問題になりそうな点

障害や問題になりそうな点として挙げられたものは各様であるが、キュレーターが本拠地とする国との物理的な距離から、リサーチコスト、作品の輸送費、作家の移動費が負担となっている事が多く指摘された。

図表・19 日本の現代美術に関する展覧会を開催する際に障害や問題になりそうな点

- ・お金と時間、これらがどの国でも問題になる
- ・リサーチやプロジェクトを進めるための訪問に係る渡航費
- ・日本の作家と仕事をする場合、輸送等のロジが高額になる。また、作家やキュレーターの為の渡航費にも制限がある。言葉の問題は克服できるが、より深く国際社会と繋がるためには英語による批評や美術史の表現物が少ないのも障壁となっている。海外のキュレーターが日本に滞在して働くための財源も限られている。日本人以外のキュレーターがもっと美術館やギャラリーで働くことで国際社会との統合を推進されるのではないか
- ・資金不足、展覧会開催を目的としたより深いリサーチの機会の欠如
- ・自分自身、日本の作家による作品をより深く理解するためのリサーチをする必要があるように思う。それによって興味のあるエリアの糸口が見つけられたら良い。そのほかは、作品設置時のコスト等
- ・輸送にかかるコスト
- ・言葉の壁
- ・2001 年以来調査目的で日本を訪れてないが、連絡の取りやすい組織が少ない。中国、韓国、東南アジアで仕事をしているが、日本のアートシーンは最も入りにくい構造をもっているように思う。多くの作品が華美で社会との関係性も希薄に感じる。もしかすると私自身の知識の足りなさ由来しているのかもしれないが
- ・田中功起の展覧会をルーマニアで企画してみたい。問題は特定のリサーチや作品展示をサポートできる施設をどう見つけるかという点
- ・国際交流基金による調査プロジェクトや展覧会に 2003 年より関わっている。またアートのシステムの改善や地域性の問題にも興味があり、日本美術の展覧会を実現するには地域のアートシーンとアーティストのニーズをより良く理解する必要があると思う
- ・特に障害は思い当たらないが、1990 年代から 2000 年前半頃に一緒に仕事をした日本の文化担当官僚が、海外からの同等な担当者をコラボレーターではなく情報屋として扱うことがあった。既にこのような傾向は改善されていると思うが、今後協業の機会がある際は、より柔軟で透明性がある体制を望みたい
- ・展覧会の資金の他、意義のある理解や協業の実現の為には、日本の作家やキュレーターと対話する機会が必要

5)日本の現代美術家に関する情報収集の方法・よく利用する情報源

日本の現代美術家に関する情報収集の方法・よく利用する情報源として、本国で日本に関して情報を持つ知人・同僚（キュレーター等）、日本の知人（キュレーター、アーティスト、ギャラリー等）に直接尋ねる、実際に日本を訪問しギャラリー、アートフェア、スタジオ等を訪問する等のほか、インターネット、特定のメーリングリスト、DM、雑誌、カタログ等を参考としている方も多かった。

図表・20 日本の現代美術家に関する情報収集の方法・よく利用する情報源

- ・何人ものキュレーターが日本を訪れコネクションを維持している。ネットワークが鍵
- ・ビエンナーレやグループ展、雑誌、インターネット、日本訪問、雑誌 Art Asia Pacific 等
- ・日本の著名なキュレーターの友人やアーティストから聞いたり、作品を実際に見たりしている
- ・日本への調査出張や facebook 等での作家とのコミュニケーションやカタログ等。国際交流基金のアレンジするレジデンスプログラムは海外のキュレーターにとって秀逸だった
- ・ギャラリーとアートフェア
- ・キュレーターを通して、またアートフェアに出展しているギャラリーを通して。そのほか雑誌、機関誌等
- ・知り合いのキュレーターや学者、ギャラリーや美術館関係者等
- ・スタジオ訪問と他のキュレーターからの推薦
- ・物理的に日本を訪れるか、知り合いの日本の関係者に確認するかの方法をとってきた
- ・Ponja-GenKon e-mail リスト
- ・多くが展覧会や AAA 等のアーカイブ等
- ・直接日本に出向き、書籍やポートフォリオを参照する
- ・日本のギャラリーの発行している e-mail の展覧会招待状、もしくは雑誌 Art Asia Pacific
- ・日本は私のリサーチ対象エリアではないので、より広い範囲でのアジア現代美術に関するディスカッションが必要な時は他のキュレーターに相談している
- ・インターネット
- ・日本人作家がマニラで展示をする際には、その情報をメールで受け取ったり、SNS を利用した告知等で知らせてもらったりしている。また日本人キュレーターによるトークに参加したりもした
- ・美術手帖を良く読みますが、最も有効なのは直接日本のギャラリーやキュレーターと話すこと
- ・スタジオ訪問、信頼のおける友人キュレーターの助言等
- ・以前から知り合いの作家や国際交流基金との仕事、作家を通して知り合いとなった作家を通じて。時にはオンラインマガジンや、アートフェア等を通して知ることもある
- ・ウェブサイトはあまり参考にしないが、グループ展のカタログやビエンナーレ、論文集等は参考にする。また知り合いのアート関係者に尋ねる等
- ・日本への訪問や、アジアやヨーロッパで開催される展覧会を通して。様々な美術館、ビエンナーレ、また韓国では作家のスタジオやレジデンス施設訪問や書籍・カタログ等。ウェブサイトはあまり参考にしない
- ・ギャラリーに直接出向き、友人の日本人キュレーターにアドバイスを仰ぐ
- ・入手可能なカタログや書籍、オンラインでの展覧会レビューや e-mail での展示のお知らせ等
- ・日本に限らず自身の知り合いの日本のキュレーターに尋ねることが多い
- ・ギャラリーウェブサイト、作家友人やキュレーター、また Artissima やバーゼルといったアートフェア
- ・実際に訪問する
- ・日本のキュレーターやギャラリーに問い合わせたり、展覧会を訪問したりすることが多い。また東京での1ヶ月のリサーチレジデンスに参加したこともある

- ・バイリンガルカタログ、AAA、その他カタログ
- ・私は実際に世界中の作品を見て回ったり、信頼できるアーティストや日本の仲間からのアドバイスを参考にしたりしている
- ・art-it、ビエンナーレカタログ、ギャラリー
- ・ARTiT、RealTokyo/RealKyoto、Tokyo Art Beat、Japan Times、美術手帖
- ・日本人作家とその作品に関しては、作家とキュレーターが一番の情報源だが、その次がギャラリー

6)日本の現代美術の状況についてリサーチをする上で不足しているもの

日本の現代美術の状況についてリサーチをする上で不足しているものとして、圧倒的に多く挙げられたのが、英語（もしくはキュレーターの自国の言語）に翻訳がされたウェブサイト、カタログ、論文、書籍、雑誌等であった。

図表・21 日本の現代美術の状況についてリサーチをする上で不足しているもの（回答群1）

- ・英語の情報が少ない。国際舞台に出ているギャラリーか美術館くらいしか英語で情報を発信していない
- ・日本の現代美術に関する英語の雑誌が望まれる
- ・カタログやウェブサイトの翻訳
- ・翻訳された論文やカタログ
- ・情報が足りないわけではないが、やはり言葉の障害が大きい
- ・他言語での日本美術シーンに関する出版物は常に必要。また英語でのオンライン情報もより効果的
- ・英語の出版物
- ・より多くのバイリンガル資料が有ると良い。また日本美術の動きと翌年の展望をリンク付きで年ごとにまとめた年報配信等
- ・自身の経験上、翻訳されていない文献が多いように思う
- ・カタログの多くは英訳があり便利である。論文誌・雑誌でもバイリンガルが増えると日本の最新のアートシーン情報が得られて将来的なプログラムにおける協業の一助になる
- ・言葉の問題が一番の障壁だと思う
- ・英語の文献が必要
- ・高いレベルで翻訳された雑誌
- ・翻訳されたカタログと現場でのリサーチ
- ・英語と韓国語の記事やエッセイ
- ・インドネシア語に翻訳された日本美術の書籍
- ・歴史的な展示では、主要な書面テキストが訳されていることが必要。翻訳された若手作家のインタビューや日本の理論的文書、批評文等も必要
- ・日英資料は2003年以降だいぶ入手しやすくなったが、より洗練された批評文や歴史調査関連文書はいまだ困難
- ・一番の障害は十分な英語やアジア言語での資料を確保すること
- ・これまで殆どの文献が日本語のみであることが問題だった。英語の文献になっているのは既に国際的に地位を確立している作家のみなので、国際的に知られていないその他の情報を調査したくても難しい。私には信頼出来る友人と同僚キュレーターがいるのでこのような情報が必要な場合は彼らに助言を求めている。また、日本の美術史に関する議論や美学に関しての資料は日本語でしか手に入らない

その他には、日本の現代美術の状況について総体的に把握することのできる Web サイトや雑誌、国際的に影響力のあるキュレーターによる日本人作家の展覧会の開催を求める意見も多数存在した。

図表・22 日本の現代美術の状況についてリサーチをする上で不足しているもの（回答群 2）

- ・日本の作家最新情報が分かるウェブサイトが有ればいいと思う
- ・日本美術に関する情報がまとったウェブサイトがあると便利だと思う
- ・批評的視点から書かれた出版物やインタビュー、主流または特定のアートトレンドを紹介するカタログ等があると便利だと思う
- ・文献よりもむしろ、必要な情報にアクセスする方法や、関係者へのコンタクト方法等が分かると助かる
- ・日本のアート、作家が集約されたポータルサイトや出版物、オンラインジャーナル
- ・足りない情報は特に無いように思う。問題は逆に多すぎる情報からどのように必要な情報を抽出するか。多くのキュレーターに足りないのは実際に日本を訪問し、作家やスタジオを訪問するための時間とスケジュールそして好奇心だ

図表・23 日本の現代美術の状況についてリサーチをする上で不足している情報（回答群 3）

- ・国際的なキュレーターによるプログラムを実現できれば、日本国外のキュレーターらにも訴求することができる
- ・日本美術のトレンドに関する適切なグループ展がそろそろ必要だと思う
- ・日本の芸術の発展に関する情報、主要美術館やギャラリーによる展覧会等

7) 将来的な共同企画・協業への関心

将来的な共同企画・協業については、今回調査に回答したほぼ全てのキュレーターが関心を持っていた。

図表・24 将来的な共同企画・協業への関心

- ・是非行いたい
- ・喜んで協業や仕事をしたいと思う
- ・もちろん関心がある。でもその為には定期的な連絡が必要だと思う。日本のキュレーターの LA 訪問やその逆といったことで関係性を確立する必要がある
- ・是非協業したい。障害は常に移動にかかるコストである。実現には財政面でのサポートが必要
- ・関心がある。ただし、協業は単発プロジェクトが多く、その後様々な考えに至るころにはプロジェクトが終了していることが多い。継続的で長期的な協働ができる資金があると良いように思う。それにより共通の興味分野やシナジーが生まれる
- ・関心がある。福岡との継続的な対話や、森美術館とも過去に話をしている。将来的に協働できると良いと思う
- ・関心がある。日本の美術館、とりわけ森美術館や東京都現代美術館のようにネットワークがあり、焦点がぶれない現代美術の美術館と協業したい。資金が一番の障害と思う
- ・関心がある
- ・日本のキュレーターとは是非、協業したい。障害は渡航費とコミュニケーションに伴う時差である。
- ・特定の障害は思い当たらない。私個人の経験はとても快適で生産的だった
- ・長期的な展覧会プロジェクトのキュレーションの為、日本の専門施設と協働したい。どの施設が適切かわからないが
- ・関心がある。そんなに障害は思い当たらない。日本の美術館とキュレーターのプロ意識を信頼している
- ・是非協業したい。六本木クロッシング（森美術館）や Discordant Harmony（広島市現代美術館）等でも協業の予定
- ・是非協業したい。ただ、現時点では特定のプロジェクトは予定していない
- ・将来的に協業したいと思っている。お互いに問題になるのはお金と時間
- ・障害は資金と地理的距離。他のキュレーターとのワークショップやシンクタンク等による、より真剣で長期的な交流の機会があれば嬉しい
- ・障害としては言語並びに美術館や施設と協働できる機会の欠如
- ・今後も協業は続けます
- ・これまで述べた施設との協業は今後も続けたい。将来的には美術館に戻る予定なので、その際には東京の近代美術館、現代美術館の双方と協業してみたいと思う
- ・これまで世界中のキュレーターと働いてきており、日本の施設とも是非協働してみたい。ただ言葉がしばしば障害となることが多い
- ・協業はいつでも歓迎する
- ・協業の可能性を共に探りたい
- ・個人的にはプロジェクトよりも作家調査の協業がしたい。社会と政治に関してや官僚的受け身主義等、アプローチの方法が異なるようだ
- ・個人的にはこれまでの協業は良い経験だった
- ・機会があれば是非また協業したい。障害はとくに思い当たらない
- ・大きな障害は無いと思う
- ・いかなる形でも協業は歓迎。特に障害は思い当たらない。一度ネットワークが構築され、プラットフォームが確立されれば、各キュレーターはそれぞれプロジェクト実現に向け動き出すに違いない。
- ・日本のアート関係者からは色々な話を聞けるので常に興味を持っているが、現時点では協業は求めている。機会があれば勿論検討したい

平成26年度文化庁委託事業

国際発信力のある現代美術のキュレーター育成のための状況等に係る調査 報告書

平成 27 年 3 月 31 日

■委託元

文化庁文化部芸術文化課 支援推進室

〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2

■発行

株式会社野村総合研究所

〒100-0005 東京都千代田区丸の内 1-6-5 丸の内北口ビル



コピー OK



障害者 OK



学校教育 OK

利用の際は必ず下記サイトを確認下さい。

www.bunka.go.jp/jiyuriyo